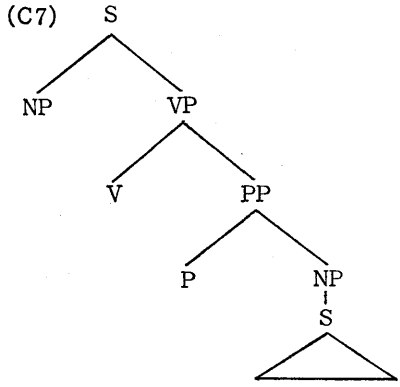
英語深層文型の一試案（Ⅳ）

—自動詞と複文型—

村　田　忠　男

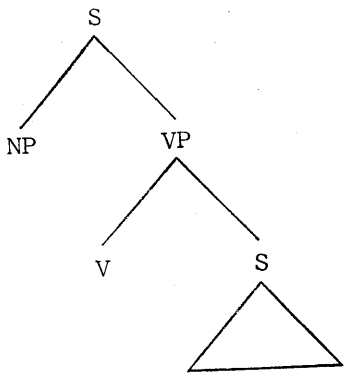
1.　第四部への序

本稿は，梅光女学院大学英米文学会発行『英米文学研究』第10号(1974)，第11号（1975)，及び第13号（1977）に発表した第一部から第三部までに続くものである。第一部で，単文型 (Simplex Sentence Patterns) をＳ１からＳ９まで，第二部から複文型 (Complex Sentence Patterns) に入り，まず文主語の型Ｃ１を，続いて第三部では Copula（be 動詞）を用いる複文型として，Ｃ２からＣ６までを扱ってきた．この第四部では，（be 動詞を除く）自動詞の後に生ずる補文の型を，まとめて考察するが，次にＣ７型とＣ８型の深層文型と代表例をあげておく。



He abstains from eating candy.
I will see to it that everything is ready in time.

(C8)



Bill condescended to stay here.
John became old.
John became a teacher.
He got killed.
John came running.
I didn't bother answering this note.

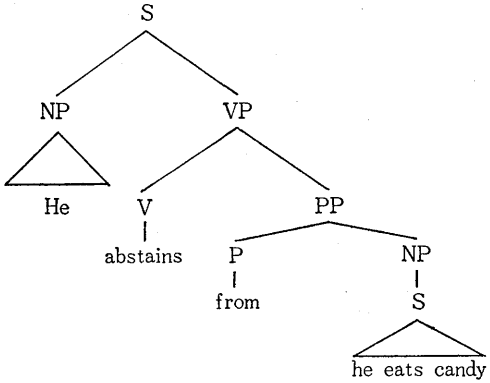
2. Complex Sentence Pattern 7 (C 7)

2. 1. C 7型に含まれる代表例は次のようなものである.

(1) a. He abstains from eating candy.
b. Tom delighted in pulling the dog's tail.
c. I insist on your being there.
d. To do so would amount to ignoring the fact.
e. We are thinking of going to Spain.
f. He swore to having seen her on the scene.

これらの文はS 6と同型で，第三部 (16) で仮定したように， Adverbial-Complement-of: [PP, VP] の機能を持つ PP の下に，単なる名詞句の代りに補文が生成された文型の例であると考てる。(1) a の深層構造は概略次のようになるであろう。

(2)



例文(1)は全て動名詞補文の例であるが，(3)のように節 that が生ずるものもある。

(3) a. I will see to it that everything is ready in time.
b. I can swear to it that he was at my house.
c. I insist on it that you should be there.
d. You must look to it that you are on time.
e. I will answer for it that this man is honest.

これらの例では，次にみるように前置詞の後に直接 that 節が生ずることはない。

(4) a. *I will see to that everything is ready in time.
b. *I can swear to that he was at my house.
c. *I insist on that you should be there.
d. *You must look to that you are on time.
e. *I will answer for that this man is honest.

現代英語では，in that や except that のような少数の表現を除いて，前置詞に直接 that 節が従うことは許されず，義務的に Extraposition が適用されなくてはならない。つまり，(1)の動名詞補文の場合はそのままでよいが，(4)のように節が選ばれた場合は，義務的に "vacuous" extraposition がかかり，空白になった位置に意味のない expletive "it" が生じて，(3)のようになるものと考えたい。

Rosenbaum (1967) が Extraposition を定式化した時には，"it" は深層構造で既に生成されることになっていた。しかし，この考え方では，次のような多くの例に，なぜ it が絶対に生じないのかを説明できない．

(5) a. *Everybody prefers it your driving slowly.
b. *Bill codescended it to stay here.
c. *They supposed it that a crowd was beginning to gather.

動名詞の補文には，一部の例外を除いて，it が生ずることはないし，また不定詞補文でも後述するＣ８型を始め，it とは縁のないものが多く，また that 節も，Extraposion の適用しない場合は多いのである．

(6) a. They doubt it that you will go.
b. They doubt that you will go.
c. They doubt you will go.
d. They doubt it very much that you will go.

(6)のような場合にも，a, b は Extraposition が適用されないままの文で，c，d は適用された文であるという (Rosenbaum (1967, pp. 43–44)。これも，むしろ，b と c，a と d の平行性を認める方が妥当であろう。つまり b と c は Extraposition の適用されていない文であり，a と d の it は Extraposition によって生じた expletive "it" であると考えたい。expletive "it" は，実は Kiparsky & Kiparsky (1970) が，(7)のように nonfactive verb の補文に Extraposition が適用して生じたものであると説明し，(8)のような factive "it" と区別して論じたものである。

(7) I take it that you all know the answer.
(8) I resent it that you all know the answer.

(7)と(8)の it を区別する Kiparsky の主な根拠は，Ross の提案した Complex NP Constraint に対する反応の差であった。

(9) a. *This is *the book* which you reported *it* that John plagiarized ϕ.
b. *This is *the book* which you reported *the fact* that John plagiarized ϕ.
c. This is *the book* which you reported that John plagiarized ϕ.

(9) b は Complex NP を越えて the book を取り出したために非文になったと説明できるが，Kiparsky は(9) a も同様に it のために非文になったと考えているようだが，しかし，Stockwell 他（1968, p. 578）が指摘したように，(9) a は次のようにもともとが悪文であって，正当な証拠にはならない。

(10) *You reported it that John plagiarized the book.

(7)と(8)の non-factive 対 factive verb の後の it も次に見るように，両方共関係節化可能であり特に it を区別する根拠は見当らない (Stockwell 他 (1968, p.578))。

(11) This is *the answer* which I take *it* that you all know ϕ.

(12) This is *the secret* which I resent *it* for anyone to know ϕ.

以上略述したごとく，(3)のような文も，(4)のような形の文に Extraposition を適用してえられ，it はそれに伴なって生じた虚辞であると考えることに対して特に反証もないように思える。注意すべきは，(3)のような動詞は Extraposition が義務的であるが，その後で it を消去する随意規則が存在し，さらに it が消去できる(3) a から(3) d までの文は，義務的に，前置詞も消去されて①，次のような文になり，一見，C 9 で扱う予定の他動詞＋目的格補文と，表面上同じ形になってしまうことである。

(13) a. I will see that everything is ready in time.
b. I can swear that he was at my house.
c. I insist that you should be there.
d. You must look that you are on time.

これらの that 節は，C 3，C 4，C 6 に於けると同様，Adverbial complement sentence（副詞的補文）であって，他動詞の目的節が Noun Phrase Complement（名詞句補文）であるのとは異なる。(6) b，c は，他動詞＋目的節の例であったが，表層構造では，これらと(13)とは区別ができないことになり，実際，辞典類の記述もまちまちである。

2.2. (3)の例文に一見似ている次のような文が存在する。

(14) a. We can *count on* it that their paper has printing errors.

b. I *wonder* (*at* the fact that) he wasn't killed.

c. Can you *wonder at* it that people get away if they live in these conditions?

count on や wonder at などは第一部のＳ７Ｃであげた laugh at, account for などと同様，密接な結合体となっているもので，単一の他動詞と同じ働きをする表現であって，受身表現が可能で②，その点，(3)と(14)は明確に区別できる③。

(15) It's not to *be wondered at* that he should want to pack up and go. (Oxford Dictionary of Current Idiomatic English—以下ODCIEと略)

しかしながら次の例はどうであろうか。

(16) I wondered to see you there.（あそこで君を見て驚いたよ。）

wonder は，この場合自動詞で，be surprised の意味に近く，to 以下は，副詞的補文で，次に扱うＣ８の例と考えられる。

(17) I wonder (that) he didn't kill you.

ところが，この文は(14) b, c のような wonder at the fact や wonder at it の省略形とみなせる。問題は，wonder at を結合体で，他動詞と考えたけれども，at it や at the fact の省略された(17)や(14) b, c の wonder は，単独では passive も適用できなくなり，(16)と同様，自動詞のようにもとれるが，しかし，これらは at が省略されたために passive が適用不可になったという理由をつけていく方がよいかも知れない。いずれにしろ wonder＋that 節などは，他動詞，自動詞の判定が困難なものの一つではある。

以上，(3)の例文に関連する問題を主に述べてきたが，(1)に類似した次のような文は，やはり decide against が結合体で，他動詞として働き受身文が可能なので，(14)と同様，ともにＣ７からは除外し，Ｃ９の例であるということになる④。

(18) We've *decided against* having a big family gathering this Christmas. (ODCIE)

このような例は，Rosenbaum (1967) では，(1)の例文と同一視されて，全

て Intransitive Oblique NP Complementation に含められていたが，本稿での分類を採用すると，Rosenbaum の Appendix の動詞リスト A. 3. に含まれている動詞のうち approve of, decide on, depend on, laugh at, look for などかなり多くのものが，結合した他動詞としてC 9に用いられる動詞の一部に編入されることになろう。

ところで，次のような例も，一見C 7型の文であるように見えるが，それぞれ前置詞以下の表現は文頭への移動が可能で，これらは副詞的補文ではなく，純粋な副詞句（節）ということになる。

(19) a. He died on arriving at the hospital.
a. On arriving at the hospital, he died.
b. The experiment failed in that it was based on a false idea.
b'. In that it was based on a false idea, the experiment failed.

副詞的補文の場合はC 7型の例のみならず，一般に，(19)のような場合程，自由に文頭に出ることは殆んどない。文頭に出るか，出ないかは，ODC IE では，[emph] で表示してある。Passive の不可能なC 7型に用いる動詞＋前置詞は，同辞典をめくった限りでは，[emph] のついたものは見つからなかった。

(20) I will *answer for* it that this man is honest.

この文中の answer for は [−passive] だけれども [A2 rel] と表示してあり，関係節化は次のように可能である。

(21) Mr. Johnson is the one *for* whom I can't *answer*.

逆に，passive 可能なC 9型に用いる結合した [動詞＋前置詞] は，[rel], [emph] 両方可能なものと，[rel] だけ可能なものが多く，[rel] も [emph] も不可能というものは今のところ見つからない。この辞典に対する調査は徹底したものではないので，単に憶測の域を出ないが，仮に上の観察が正しいとすれば，[−passive] と [−emph], [+passive] と [+emph] はそれぞれ平行的で関連がありそうである。一方，[rel] だけ可能なものは [±passive] の両方に存在しているので，passive を中心とした分類には直接の関わりはなさそうであるといえよう。

以上で，C７型の認定と，紛らわしい文との区別，及びそれらに関連した問題を提示した。

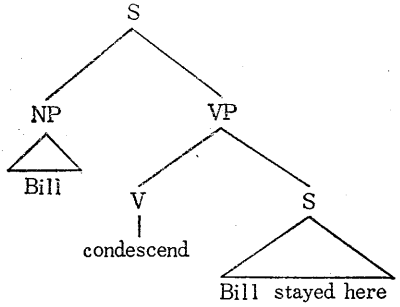
3. Complex Sentence Pattern 8（C8）

3.1. C８型に含まれることが確実な例は次のような文である。

(22) a. Bill condescended to stay here.
b. He did not bother to shave.
c. I hasten to reply to your letter.
d. He stooped to do the base thing.

これらは，いずれも自動詞＋不定詞の形をとるが，本稿では，第三部(16)，及び本稿のC７型でも用いた Adverbial Complement Sentence（副詞的補文）の名称を，不定詞の部分に与え，(22) a の深層構造は概略次のようであると仮定する。

(23)



上の図でわかるように，これは Rosenbaum (1967) が Intransitive Verb Phrase Complement と呼んだ補文構造で，Sを直接VPに支配させる根拠を次のように二つあげた。

(24) a. *What Bill condescended was to stay here.
b. *To stay here was condescended by Bill.

(25) a. What Bill prefers is to stay here.
b. To stay here is preferred by Bill.

しかし，現在では，Emonds (1970) の指摘以来，a の Pseudo-Cleft テストでアウトになると，単に「一つの構成素を成さない」ということを示す

だけで，NPでないという主張はできなくなり，またbの受身テストも，Stockwell 他 (1968, p.545) で，主語のない不定詞句は，(22) で用いたような動詞だけでなく，普通，他動詞と考えられている次のような例でも，いずれにしろ悪文であることが指摘されて，Rosenbaum のあげたテストはどちらも否定されている。

(26) To examine John was $\left\{\begin{array}{l}\text{?preferred}\\ \text{*demanded}\\ \text{?desired}\\ \text{*intended}\end{array}\right\}$ by the doctor.

しかし，Kajita (1968, pp. 16–2p0) が利用した補文を it に変えるテストは有効であるように思える。

(27) a. *We expected him to work at the museum, but he did not condescend it.

b. *We expected him at least to shave, but he did not bother it.

(28) a. We did not expect them to elect John chairman, but they managed it.

b. We expected them to elect John chairman, but they avoided it.

(28)の manage, avoid は他動詞なので，目的語の it を従えることができるが，(27)のC８型では，it に縮少できないということは，少なくとも，補文がNPに支配されてはいないと言えるだろう。それでは，逆に，純粋な副詞句（節）ではないかという予測も立てられるが，しかし，次の Pseudo-Cleft 文が示すように，condescend, bother だけでは，VP を構成していないことがわかる。

(29) a. *What Bill did to stay here was to condescend.

b. *What he did to shave was to bother.

勿論，次のように，VP 全体であれば focus の位置に生ずることができるのである。

(30) a. What Bill did was to condescend to stay here.

b. What he did was to bother to shave.

また，ある種の純粋な副詞句であれば付加可能な in order や so as がC８型には決して付けられない。

(31) a. *Bill condescended $\left\{\begin{array}{l}\text{in order}\\ \text{so as}\end{array}\right\}$ to stay here

以上は，Kajita (1968) の提案に基づくものであるが，次のような例は；Kajita (1968, p.19) と Oikawa (1976, p.107) では説明が異なっている。

(32) a. *To examine John the doctor condescended.

b. *To add that he was not complaining, he hastened.

Kajita は，前置不可能なのは，純粋な副詞句ではないからであると述べ；Oikawa は Topicalization 不可能だと見て，NP ではないと述べている。私の考えではこれは両者共正しく，つまり，(32)は；C８型の補文がADVPでも，また目的格の NP Complement でもないことを示していると思う。以上，(27)から(32)までの議論は，(23)のような [S: VP] の深層構造を仮定することに対して，積極的ではないが，支持的な証拠になりうるであろう。

C８型で，不定詞になる副詞的補文を取りうる動詞にはどのようなものがあるだろうか。Rosenbaum の自動詞句補文をとる動詞のリストとして Appendix A. 5. にあげられたものは次の通りである。

(33) A.5.1. "for-to" complementizer

begin, cease, commence, condescend, continue, dare, decline, endeavor, fail, get, grow, hasten, manage, proceed, refuse, start.

このうち，begin, cease, commence, continue, proceed, start などは，第二部で扱ったC１G型の temporal predicate に含められることになるし，manage は (28)a で示したように it をとるので他動詞と考えて，C９型の動詞リストに加えられるだろう⑧。彼のリスト A. 5.2. にあげられた ing 形を補文にとる動詞——cease, commence, complete, continue, finish, quit, recommence——も，第二部で述べたように，C1G 型ないし，C９型に含められることになる。

結局，(33)の残ったものと，Kajita (1968, p.161) の Group 2 と Group 6

の動詞の一部，それに，私の見つけた動詞も加えると，C８型に使用される不定詞補文をとる動詞のリストは次のようになるであろう⑥。

(34) ache, agree, aspire, blush, bother⑦, combine, come, condescend, consent, dare, decline, delight, endeavor, get, grieve, grow, hasten, hesitate, long⑧, pant, refuse, scruple, seek, serve, smile, stoop, strive, struggle, submit, tend, trouble, try, venture, volunteer, weep, yearn.

3.2.1. 以上のように，不定詞の補文をとる構造については，未だ定説はないにしても，変形文法で早くから論じられてきたけれども，次のような様々の補部は，どのような深層構造を設定したらよいのであろうか？

(35) a. John became old.
b. Bill got sleepy.
c. John felt angry.

(36) a. John became a teacher.
b. The coach stayed a pumpkin.
c. The doctor turned author.

(37) a. He got killed.
b. Many soldiers lay wounded.
c. He stood convicted of treason.

(38) a. John came running.
b. Mary stood singing a song.
c. Bill sat talking.

(39) a. I didn't bother answering this note.
b. She declined joining our party.

自動詞の後には，それぞれ，形容詞，名詞，過去分詞，動名詞が続いているが，これら全てをC８型に含め，(23)と同等の深層構造を仮定するのは，決して不自然ではないように思われる。(34)の動詞リストが示すように，不定詞補文を伴うC８型の文も，Rosenbaum の VP Complement から比較すると，随分広範囲の意味関係を持ったものになっている。そして，(35)から(39)までの文も，同様に，それぞれの結びつき方は一様ではない。しかし，注意したいのは，(22)の文と同様，全て，Equi NP Delection が義務的であ

り，換言すれば，表層構造では補文の主語が出現することは決してないという共通特徴を持っていることである。

このように，これらの自動詞の後の要素に対しては，表層構造で異主語が生ずることは決してないので，深層構造に補文を仮定するのは間違いであるという議論がでるかも知れない。しかし，次のような例も，やはり，補文の主語が直接，表層構造に出ることは決してないが，変形文法では動詞補文が仮定されており，本稿の(35)から(39)のような例だけに補文を認めないという根拠は存在しないであろう。

(40) a. *John persuaded [the doctor] [$_S$ (for) $\left\{\begin{array}{l}\text{the doctor}\\ \text{him}\\ \text{himself}\end{array}\right\}$ to examine Bill $_S$].

b. *John forced [Bill] [$_S$ (for) $\left\{\begin{array}{l}\text{Bill}\\ \text{him}\\ \text{himself}\end{array}\right\}$ to be hit by Mary $_S$]

ただ，(22)の condescend 型や(40)の persuade 型の補文と，(35)から(38)までの相違は，Equi NP Deletion が義務的であるだけでなく，To Be Deletion も以下に示すように，殆んどの場合に義務的であるという点である⑨。

(41) a. *John became [$_S$ he was old $_S$]
b. *John became to be old.
c. John became old.⑩

(42) a. *John became [$_S$ he was a teacher $_S$]
b. *John became to be a teacher.
c. John became a teacher.

(43) a. *He got [$_S$ he was killed $_S$]
b. *He got to be killed.
c. He got killed.⑪

(44) a. *John came [$_S$ he was running $_S$]
b. *John came to be running.
c. John came running.⑫

以上の(35)〜(39)のようなC８型への新しい候補に用いられる動詞は，例え

ば，become の後には，表層構造では名詞，形容詞のみが表われることが許され，不定詞，過去分詞，動名詞は生じないとか，自動詞の get には形容詞，過去分詞，不定詞（注の⑪参照）のみが後続する，などのごとく，一つ一つ独特の特性を持っており，第三部の５節，Ｃ３，Ｃ４Ａ型のところで，形容詞の補文標式の選択についても述べたように，ある程度のグループに分類できる可能性があるとしても，結局は，lexicon で固有の特性を記述することになるものと思われる。

3.2.2. 以上のような副詞的補文を導入する方法に対立する考え方は，Predicate ないし主格補語に相当する範ちゅうを PS rule に導入することである。実際，Chomsky(1965, p.107) は，VP→V + Predicate を，VP→Copula+Predicate とは別に，PS rule に盛り込んでいる。

Thomas (1965) などは入門書でもあり，もっとルーズな提示の仕方をしているが，一応，場所によっては，Chomsky と同様に be 動詞と他の自動詞では区別している。しかし，改訂版と思われる Thomas & Kintgen (1974, p.245) では，VP→V + Predicate に相当する PS rule は説明もなく外されている。他の入門書，例えば，Burt (1971) や Liles (1971, p.27) も，be+Predicate の rule のみで，自動詞+Predicate に相当する規則は用いられていない。

(45) John became a teacher. (=(36)a)

(46) John hit the teacher.

従って，上のような文は，これらの方法ではいずれも VP→V+NP の PS rule しか使用できず，Direct-Object-of: [NP, VP] によって，(45)a の名詞も直接目的語であると認定され，自動詞と他動詞の区別もないことになってしまう[13]。勿論，本稿のように(45)などを副詞的補文から導くことにすれば，be + Predicate と V+S の規則だけで済むので，(45)と(46)の区別は可能であるが，しかし，そのような解決法は，以上あげた本の中には見い出せない。従って，(36)などの文が正しく生成されないという点で，Thomas & Kintgen, Burt, Liles などの PS rule は不充分であるということになる。

3.2.3. 別の考え方は，学校文法的に VP→Copula + Predicate に類し

た規則の Copula の中に，be だけでなく，いわゆる Linking Verb も含めてしまうという方法であるが，しかし，be は次のように，Linking Verb とは決定的に異なる特徴を持っており，普通，この方法は採用されない。

(47) a. Was John a teacher?
b. John wasn't a teacher.

(48) a *Became John a teacher?
b. *John becamen't a teacher

逆に，Copula を使用しない方法も考えられたことがある。Bach (1967) は，be（本動詞，進行形を全て含む）を，完了形の have といっしょに，変形によって Aux に導入する方法を提案し，VP→Copula + Predicate 及びVP→V+Predicate という Chomsky (1965) 式の問題点，つまりPredicate の重複がさけられるとした。しかし，井上（1975, p. 90）は，Predicate の重複は be をVと考えることによっても避けられると Bach を批判しているが，(47) (48) にあげたような大きな差違は，やはり井上の方法でも説明できなくなり，この考え方も採用できない。Bach の方法も，本動詞の be をAux と考えるので，(47)a などは動詞のない文となり，名詞（句）を動詞であると論じなくてはなくなり，やはり採用できない。

3. 2. 4. Chomsky (1965) の VP→Copula + Predicate とは別にVP→V+Predicate を導入する方法は，Chomsky (1970, p. 186) でも，維持されているように思える[14]。

(49) a. John felt angry. (=(35)c)
b. John felt anger.
c. John felt that he was angry.

以上の三つの文について，チョムスキーは(49) a, b を NP+V+S の構造から派生する考えは間違いであり，a, b は NP+V+Pred の構造，c は NP+V+S の構造をそれぞれ持つと述べている。その根拠は，a, b の feel が進行形になれるのに，c は不可だというが，しかし，これは c が精神的な知覚の意味で用いられているので，feel は stative verb であるから進行形にならないというだけのことで，正当な証拠にはならない。feel angry（腹

だたしく感ずる）とfeel that one is angry（自分が腹を立てているのがわかる）では意味が違うという説明も，もっともではあるが，しかし，このことは，単に，aとcのfeelは別の用法であるということを述べただけで，NP+V+Sをaにあてはめるのに反対する証拠にはならない。

(50) a. John is angry.
b. *John is anger.
c. *John is that he was angry.

feelのかわりにbeを入れるとわかるように，いわゆるPredであるのは，aだけであり，bとcのfeelは完全な他動詞である。beのfeel＋名詞がV+Predでないのは，次のように受身表現があることから明らかであり，(45)aの名詞とは異なる。

(51) An earthquake was felt last night.

(49)cがa, bと異なるのは，既にチョムスキー自身が表示したことになり，結局，彼の説明は，NP+V+Sへの反証を示しえなかったばかりか，(49)bを(36)aと同一視するという自動詞と他動詞との混同まで犯していることになる。

3.2.5. Wasow (1977, p.339) は次のような例をあげて，補部については，深層構造でVP→V+AP (=Adjective Phrase) から生成する提案をし，補文の考えは好ましくないとしている。

(52) John { acted / became / looked / remained / seemed / sounded } { happy / angry at the world / eager to win / elated / annoyed at us / convinced to run } ⑮

確かに，これらの補部は，表層では形容詞（句）であるが，(36)のように名詞が補部に生じた場合は，VP→V+NPと考えるのであろうか？　もし，そうだとすれば，(45)と(46)を対照させた所で述べたのと同じ問題が生じてしまう。

(53) a. He got (*very) killed (=(37)a)

b. He got (*very) thrown out of the house.

さらに(52)にあげてある動詞と異なり，getは，(53)に見るように補部に形容詞だけでなく，明らかに過去分詞が生ずることができ⑯，補文の中でPassiveが適用された例だと考えた方が解決が簡単であり，いずれにしろ，自動詞＋補文の考えは必要になろう⑰。

Wasowの論文中，To Be Deletionを変形規則と考えると問題が生ずるという指摘などは，本稿とも関わりのあるところで，今後多いに検討されるべきであるが，(52)などの補部を，補文から導くことに反対するだけの根拠が示されたわけではなく，むしろ，新たな問題が起こる可能性のあることを指摘しておきたい。

3.2.6. 次の三つの文はどうであろうか。

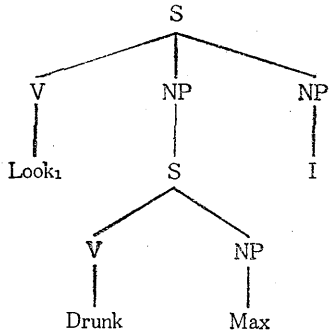
(54)a. Max looked drunk to me.

b. It looked to me like Max was drunk.

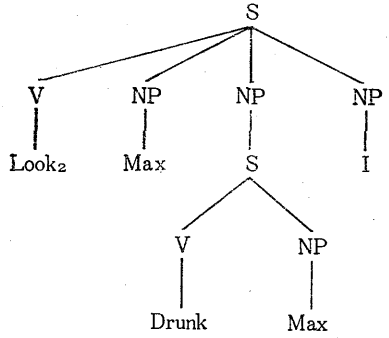
c. Max looked to me like he was drunk.

Murakami(1978)は，(54)b及び(54)cの基底構造をそれぞれ次のように考えている。

(55)(=(54)b)



(56)(=(54)c)



上の図は，文法関係の規定が不明確で問題があるように思えるが，それぞれの基底構造から，(54)aが派生されるという主張に今は注意を向けたい。bとcはもともとIt looks like rain(ing)のような表現法であったのが，ロ

語で like を接続詞的に用いたものであろう。村上はaの文意のあいまい性を，(55)及び(56)から種々の変形操作を経て派生させることにより説明しようと試みているが，しかし，aは，bやcとは違った統語的特性を示すように思える。

(57) a. Max looked $\left\{\begin{array}{l} \text{(very)} \left\{\begin{array}{l}\text{drunk}\\ \text{excited}\\ \text{old}\end{array}\right\} \\ \text{*killed} \\ \text{*very killed} \end{array}\right\}$

b. It looked to me like Max was $\left\{\begin{array}{l} \text{(very)} \left\{\begin{array}{l}\text{drunk}\\ \text{excited}\\ \text{old}\end{array}\right\} \\ \text{(*very)} \quad \text{killed} \end{array}\right\}$

c. Max looked to me like he was $\left\{\begin{array}{l} \text{(very)} \left\{\begin{array}{l}\text{drunk}\\ \text{excited}\\ \text{old}\end{array}\right\} \\ \text{(*very)} \quad \text{killed} \end{array}\right\}$

すなわち，(57)aには，very が付加可能な形容詞か，または形容詞化した過去分詞しか用いられず，純粋な過去分詞を用いることはできないが，しかし，(57) b,c の like 以下の節にはそのような制限は見られない。従って，(54)b, c をどのような深層構造から派生するにせよ，(54)a のような文は一応切り離して考えた方がよいように思われ，本稿では，(54)a のみ C8 型の例であると考え，(35) と同様のグループに入れておく。

3.3. 以上で，一応，自動詞の後に生ずる補文の考察を終えたいが，Adverbial Complement Sentence（副詞的補文）と本稿で呼んでいる構文についての包括的な研究は，未だ存在せず，3.2. の各節で見たように，断片的な提案は数多いが，類似した構文との関連まで徹底的に議論したものは，殆んど見つからなかった。

従って，主に，変形文法の成果を利用して，深層文型を論じるのが主目的であるこの研究も，今回のような構文については考察が困難であり，積

極的な証拠も見つからないままに仮説を提出した部分が多い。将来の改訂を待つのみである。

次回は，他動詞の補文の型を扱う予定である。（1978年8月27日）

注

① it が消去された後の中間構造では，前置詞と that 節が続いてしまうので，前置詞消去変形が適用されない文は非文と認定されることになるが，この前置詞消去規則は，第三部の5節で扱った of の消去（次の (i) を参照）

(i) *I am certain of that Dick is loyal.

と同じ規則であり，変形規則としての妥当性もあるように思える。しかしながら，Extraposition によって生じた expletive it の消去は，一部の動詞にしか認められず idiosyncraticなので，変形規則としては認められない可能性が多く，そうだとすれば lexical rule の一種になるのであろうか。

Horn (1974, p.352) が提案している surface filter は，$P_{NP}[S]_{NP}$ のような連鎖の文を排除するというのであるが，in that S や except that S のような文は勿論，Iwakura (1977) が指摘するように，前置詞＋動名詞補文も全て排除してしまい，強力すぎるので修正が必要である。

② 松井（1978）は，動詞と前置詞の結合度合を調査し，次の五種類に分けている。

(i) He put on his raincoat.

(ii) He got on the bus.

(iii) He commented on the news.

(iv) He came on Monday.

(v) He sat on the bench.

(i)の on はいわゆる副詞であり，(iv)，(v) は純粋な副詞句であることは明白である。問題は (ii) と (iii) を区別していることであるが，松井の指摘するところでは，要するに，(ii) は figurative expression で，(iii) はVもPも本来の意味を残している表現だというのである。統語的テストとして，(ii) は受身不可で (iii) は可能であるという。

(ii)′ *The bus was got on.

(iii)′ The news was commented on.

彼女のあげる他の統語テストでは，(ii) と (iii) は特に有意な差を示していない。第一，受身文テストも，figurative expression であるか，ないかということとは直接の関わりはないように思える。例えば belong to などは，idiom 的な要素はなく，ODCIE にも記載されていないから，彼女の分類では (iii) に入るはずだが，しかし，belong to は受身文が不可能である。逆に，明らかに idion である

と思えるもので受身になるものも，数多く今述べた辞典には見出せるのである。idiom らしさの程度というものは，明確な一線の引けるものではないように思えるので，いずれにしろ，松井の分類には不明確な点が残ることになろう。

③ このような動詞＋前置詞に類した idiom は，ODCIE に特性が表示してあり [A2] だけになっているもので，さらに補文の生ずる例が，本稿のC７に属することになり，(1)や(3)はその例である。それに対して，count on や wonder at の類は同辞典では，[A２ pass] の表示になっており，passive 可能という意味である。

序でながら，変形文法で passive 変形と呼んでいる規則は，厳密に言えば Agent Postposing, NP Preposing のような規則に分解できることは既によく知られている。また，最近では，受身変形なるものは存在せず，別々の深層構造から生成されるというラディカルな見方もあるが，本稿では，一応“伝統的”な立場に立っておく。

④ (i) I forgot about mailing the letter.

序でながら，この例も wonder に劣らずやっかいである。(i) は，(イ)手紙を出すのを忘れた。(ロ)手紙を出したことを忘れてしまった。の二通りの解釈が可能で，それぞれ，(イ)′，(ロ)′ と同じ意味である。

(イ)′ I forgot to mail the letter.

(ロ)′ I forgot mailing the letter.

つまり，どちらの解釈をとるにしろ，(i) の forget about は passive 適用不可で，統語的には自動詞＋前置詞句のC７の例であるのに，同じ意味の(イ)′，(ロ)′ の forget は完全に他動詞で，C９の例ということになってしまう。wonder の例以上に，自動詞と他動詞の境界が実質的に何なのかを考えさせられる例である。

⑤ Postal (1974, p.292) のリストは，Raising の観点から分類しているので，私の分類でC１B (appear など)，C１F(happenなど)，C１G (begin など) 及び C８(come, grow, tend) に入れられるものが混在している。

序でながら，Eckman (1977) の Raising をめぐる言語類型学的な考察に対して，ささやかな批判が村田 (1978) にある。

⑥ (34)のリストの半分位は新たに加えたものであるが，その基礎資料として，元永良子君（梅光女学院大学学生）の提出したレポートが役立ったことをここに記して感謝したい。

⑦ 第二部のC１E型に入れた emotive predicate の bother とは別の使い方である（次はC１Eの例）

(i) It bothers me for John to have hallucinations.

⑧ (i) I long to come.

(ii) I long for John to come.

(iii) *I long John to come.

long や get のような動詞は，Equi NP Deletion は義務的であるが，他のC 8 の殆んどが Like Subject Constraint を受けるのに対して，補文の主語が異なる例も存在するので，さらに下位区分すべきかも知れない。しかし (34) の動詞は，(23)のような構造を取りうるという点では，全て共通である。

⑨ (39)は動名詞補文を従えているものだが，これらは To Be Deletion は適用せず，EquiNP Deletion だけでよいので，むしろ(22)に似ているといえる。

(1) a. *I didn't bother [$_S$I answered this note$_S$]

b. I didn't bother answering this note. (=(39)a)

Kajita (1968) は，bother, decline, venture を，動名詞を従える自動詞の例として，Group 2 のリストに加えているが，動名詞補文を it に縮少できないことを自動詞説の根拠としていると考えてよいだろう。(39) のような用例は実際には数少なく，venture の例は辞典類には見つからなかった。また，大抵の辞典はこれらを他動詞として記載している。

序でながら，Hornby (1975) の自動詞型の中にも，動名詞を従える例は登場してこないが，VP 2 E, Table 25 の現在分詞を従える例文中に，Do you like to go dancing? と誤って動名詞の例がまぎれ込んでいる位のものである。ただし，この例は，(39) とは異なり，*Where* are you going? ——I'm going *dancing*. でわかるように副詞用法である。go drinking, go beer-drinking のように複合名詞化した用法も存在することから，この ing を現在分詞と考えるのは正しくない。なお，go—ing の特性は Silva (1975) が論じているが，この ing 形が動名詞か現在分詞かは決定していない。

⑩ Fraser (1974, pp. 37—38) は，明確に定式化しているわけではないが，(35) のように自動詞に形容詞の続く例について，自動詞＋補文から派生する考えを示しており，その根拠として，

(i) The man remained totally ignorant of it.

(ii) The man is totally ignorant of it.

be 動詞の後の形容詞と同様に修飾句が付けられ，(iii)と(iv)の関係との平行性を考えているようである。

(iii) The man forced the door completely open.

(iv) The door is completely open.

序でながら，remain などは次のように that 節を従えて，Equi NP Deletion が適用しないように見える例が存在するが，しかし，第三部の⑩で述べたように，これは (vi) に Extraposition from NP の適用した文で，C 8 型の remain とは異なる。

(v) The possibility remains [that he is not going to recover].

(vi) The possibility [that he is not going to recover] remains.

⑪ get to do の形もあるが，その get は (22) に類した用法で，「どうにかこうにか～する」という意味であり，それに対して，(35) C のように形容詞を従える get や，この (42) C のように過去分詞を従える get は，「～になる」という動作や変化を表わすもので，意味が異なる。つまり，同じ C 8 の例であるが，To Be Deletion が義務的なもの ((35) C や (42) C) と，適用してはならないもの ((34) の get) との二種類の get があることになる。

(i) They got talking together.

(i)の get は「～し始める」という意味で，begin と同じく C 1 G の例である。

なお，get については Kimball (1973) が生成意味論の立場から，補文を用いた分析を行っているが，本稿の立場とは議論がかみ合わない。Hasegawa (1968) は，(42) C を本稿のように，動詞句補文から派生することを提案している。

⑫ このような例は，従来の文法書にもよく説明してあるように，John came と John was running の合成した意味であり，ing 形は明らかに現在分詞であるが，Palmer (1974, p. 211) は，finish—ing の動名詞と同一視しているのは疑問である。

⑬ Lakoff (1970) では，(45) が V＋NP と分析されて passive 変形が適用してしまうので，それを防ぐために rule feature の概念が用いられたのであった。しかし，いわゆる名詞の主格補語を従える自動詞全てに，passive 変形は適用しないのであるから，元来例外を説明するための rule feature という考えをあてはめるのは，やはり好ましくないであろう。本稿のように，V＋S を導入すれば，そのような問題は生じない。

⑭ 寺津 (1975) は，最近の変形文法の考え方として，なるべく表層構造に近い深層構造を設定する傾向があると述べ，

(i) John looks happy.

(ii) John painted the house red.

などは，VP→V (NP) Pred のような PS rule を設定すれば十分であるという，Milsark, Green, Jackendoff, Emonds らの考え方を紹介している。Emonds (1970) を除いて，筆者未見につき何も語れないが，Emonds (1970, pp. 38—39) は，他動詞用の VP→V NP とは別に，$VP \rightarrow V \begin{Bmatrix} +PRED \\ NP \\ AP \end{Bmatrix}$ のごとく素性 [+PRED] を PS rule に導入している。ただし，Emonds (1970) の改訂版 (1976) には，私の知る限りでは，Pred の議論は登場してこない。

Jackendoff は，最新の論文 (1977b) でも，Pred に相当する考えをとっているが，彼の PS rule は X-bar convention に基づくもので，Pred に相当するところも [−Obj, +Comp]''' のような素性表記を base rule に使用している（同書，p. 69)。従って，彼は Pred というのは Agent などと同じく意味関係を表わす

もので，そのまま PS rule に用いるのは良くないとして Emonds (1970) を批判している（同書，p. 67)。

私の深層文型の研究は，一貫してスタンダードな方式の PS rule を用いてきたので，いずれにしろ，このようなやり方をそのまま利用するのは困難である。

なお，become，stay，remain などの意味解釈部門に関する考察を Jackendoff (1976)が行なっている。

⑮ seem はC１B型に属す文主語をとる動詞で，別に考えるべきであるが，Wasow の議論では型の違う動詞がいっしょに論じられている場合がいくつかある。

⑯ F.R. Palmer ((1965), pp. 167–168) 参照。

⑰ Jackendoff (1977a, pp. 273–275) 及び (1977 b, pp. 232–234) は，普通の受身文も，過去分詞から後の部分が Adjective Phrase であると考えており，その理由は，be 以外に get なども(53)のごとく過去分詞を従えるが，その同じ get が今度は，形容詞も従えることができる (e.g., He got old.) という平行性の存在によるとしている。これは，しかし，あまりにも単純な関係づけのように思われる。彼自身認めているように，もし，以上を全て AP と考えるのなら，なぜ，あらゆる形容詞（句）の位置に受身形の VP が生ずるとは限らないのかを説明できないことになり，やはり，overgeneralization であると言わざるをえない。

同じ Jackendoff (1977 a, b) の論文には，V+PP に含めるべき例として，次のようなものをあげている。

(i) Bill remained working.

(ii) Bill remained at work.

(iii) John is working

(iv) John is at work.

つまり，進行形の現在分詞（句）をＰＰと考えているのだが，その根拠は，(ii), (iv) のような文との平行性に基いている。しかし， at work のような言い換えを持たぬ現在分詞（句）はいくらでも存在しており，普通認められている現在分詞と形容詞との接近ないし平行性よりも，こちらの方を重要視するだけの根拠が示されない限り， V+AP 説と同様，受け入れ難い方式のように思える。

(iii) と (iv) については，彼は be を V の一種としており，その点でも(47)(48)について述べたのと同じ問題点が残る。

参考文献（第四部で使用したもののみ）

Bach, E. (1967), "*Have* and *be* in English syntax," in *Language* 43 pp. 462–485.

Burt, M.K. (1971) *From Deep to Surface Structure.* Harper and Row.

Chomsky, N. (1965), *Aspects of the Theory of Snytax.* M.I.T. Press.

——, (1970), "Remarks on nominalization," in Jacobs and Rosenbaum (eds.), *Readings in English Transformational Grammar*. Blaisdell.

Cowie, A.P. and R. Mackin (1975), *Oxford Dictionary of Current Idiomatic English* (ODCIEと略). Oxfored U.P.

Eckman, F. (1977), "On the explanation of some typological facts about raising," in Eckman (ed.), *Current Themes in Linguistics*. Halsted Press.

Emonds, J.E. (1970), "Root and structure-preserving transformation..' Unpublished Ph. D dissertation, M.I.T.

——, (1976), *A Transformational Approach to English Syntax*. Academic Press.

Fraser, B. (1974), *The Verb- Particle Combination in English*. Taishukan.

Hasegawa, K. (1968), "The passive construction in English," in *Language*, 44, pp.230–243.

Horn, G.M. (1975), "On the nonsentential nature of the POSS-ING construction," in *Linguistic Analysis*, Vol. 1, No. 4, pp. 333–387.

Hornby, A.S. (1975), *Guide to Patterns and Usage in English*. Oxford U.P.

井上和子 (1975), "進行相, 完了相の場所的解釈, " in 英文学研究第52巻 1, 2 合併号, pp. 87—105. 日本英文学会。

Iwakura, K. (1977), "The syntax of complement sentences in English," in *Linguistic Analysis*, Vol.3, No.4, pp. 307–346.

Jackendoff, R.(1976), "Toward an Explanatory Semantic Presentation," in *Linguistic Inquiry*, Vol.7, No.1, pp. 89–150.

——, (1977a), "Constraints on phrase structure rules," in Colicover, Wasow and Akmajian (eds.), *Formal Syntax*, pp. 249–283. Academic Press.

——,(1977b), $\bar{X}$ *Syntax: A Study of Phrase Structure*. M.I.T. Press.

Kajita, M. (1968), *A Generative-Transformational Study of Semi-Auxiliaries in Present-day American English*. 三省堂。

Kimball, J. (1973), "Get," in Kimball, J.(ed.), *Syntax and Semantics* Vol.2, pp. 205–215. Seminar Press.

Kiparsky, P. and C. Kiparsky, (1971), "Fact," in Steinberg, D. and L. Jakobovits (eds.), *Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Liguistics, Anthropology and Psychology*. Cambridge U.P.

Lakoff, G. (1970), *Irregularity in Syntax*. Holt, Rinehart and Winston.

Liles, B.L. (1971), *An Introductory Transformational Grammar*. Prentice-Hall.

松井千枝子 (1978), "前置詞の分類, " in 英語青年 3 月号, pp. 592–593. 研究社。

Murakami, T. (1978), "Some aspects of perceptipon predicates in English," in *Descriptive and Applied Linguistics*, Vol. XI, pp.105–118. ICU.

村田忠男 (1978) "日本語と英語の表現構造" in 佐藤泰正編「日本人の表現」, 笠間書院。

Oikawa, R. (1976), "On the distinction between NP and VP complement sentences," in英語学第15号, pp.103–112. 開拓社。

Palmer, F.R. (1965), *A Linguistic Study of the English Verb*. Longman.

——,(1974), *The English Verb*. Longman.

Postal, P.(1974), *On Raising*. M.I.T. Press.

Silva, C. (1975), "Adverbial Ing," in *Linguistic Inquiry*, VI, pp. 346–350.

Stockwell, R.P., P. Schachter and B.H. Partee (eds.) (1968), "Integration of transformational theories on English syntax." Reproduced by National Technical Information Service.

寺津典子 (1975), "To—Be 削除に関する覚え書き" in 英語文学世界 8 月号, pp. 34–37. 英潮社。

Thomas, O. (1965), *Transformational Grammar and the Teacher of English*. Holt, Rinehart and Winston.

Thomas, O. and E.R. Kintgen, (1974), *Transformational Grammar and the Teacher of English*. 2nd Edition. Holt, Rinehart and Winston.

Wasow, T. (1977), "Transformations and the lexicon," in Culiciver, Wasow and Akmajian(eds.), *Formal Syntax*. Academic Press.

(付記：直接議論には関わりのない論文も，注で言及した場合などは，上の参考書表に入れておいた。また，特に cruial な場合を除いて，例文の出典はいちいち記さなかった。